

『菩提場莊嚴陀羅尼經』の 2つの蔵訳テキストについて

名 取 玄 喜

0. はじめに

『菩提場莊嚴陀羅尼經』（以下『菩提場經』）は、「菩提場莊嚴」という陀羅尼をめぐる因縁譚や、その陀羅尼を用いたさまざまな修法を説く、大正蔵で7頁ほどの比較的短い經典である。とくに仏塔に「菩提場莊嚴」陀羅尼を納入することによる功德が強調されるため、チベットでは、陀羅尼の仏塔納入を勧める經典群「五部大陀羅尼（gzungs chen sde lnga）」の1つに数えられている¹。また最近の研究では、修法用の画像（paṭa）と曼荼羅の両方が説かれることから、同じく陀羅尼をめぐる因縁譚と修法用の画像・曼荼羅を説く『大寶廣博樓閣善住秘密陀羅尼經』との構造的類似が指摘されている（大塚 [2013 : 686]）ほか、画像を曼荼羅発展の初期段階に位置する「叙景曼荼羅」と捉える観点からしばしば言及されることがある（田中 [2010 : 44-48]）。そうしたなか、仏教徒の実践という観点から『菩提場經』を本格的に取り上げて重要な研究成果をもたらしたのは、ショペン（Gregory Schopen）である。

この經典のサンスクリット原典は散逸しており、従来は関連資料として、不空訳の漢訳一本と、チベット大蔵經に収められる不空訳からの重訳一本（Toh 508）、『菩提場經』に説かれる3つの陀羅尼（根本呪・心呪・隨心呪）を含む小篇一本（Toh 509）のみが知られていた。このうち Toh 509 は、陀羅尼そのもののほかに、陀羅尼とその仏塔納入を勧める經文が付され、コロフォンには『菩提場經』から抜粋されたものと記されている²。ショペンは、オリッサのカタックおよびナーランダー遺跡などから出土しているテラコッタの一部が、この Toh 509 と一致することを突き止めるとともに、6-9世紀のビハール、10世紀頃のオリッサ地方の仏教徒たちの間で、この陀羅尼を用いた実践が盛んであったことを指摘した（Schopen [1985]）。ショペンのこの研究によって、ポスト・グプタ期の

インド仏教における陀羅尼の役割や仏塔信仰の形態を考える上で、『菩提場経』が注目すべき内容をもっているということがはじめて明らかになったといえよう。

1. 本稿の目的

ところで、上記のように Toh 509 には、インドにさかのぼることが可能な原典が発見されている一方で、Toh 508 は A.D.1743 にモンゴル人僧ゲンポキャブ (Mgon po skyabs 工布查布) によって不空訳『菩提場莊嚴陀羅尼經』から重訳されたものである。この翻訳はゲンポキャブの当時、サンスクリット原典から翻訳されたチベット語訳『菩提場経』が失われていたために、その欠を補完するべく行われたとされている。

このようなチベット語訳不在の状況は、古くはケードゥプジェ (Mkhas grub rje, A.D.1385-1438) の著作『タントラ部概論建立広釈 (rGyud sde spyi'i rnam par gzhag pa rgyas par brjod)』(以下『概論』) においてすでに示唆されているから、遅くとも15世紀まで遡る³。ショペンも上記の研究に際しては、『菩提場経』の資料として Toh 508 を用いざるを得ず、サンスクリット原典から翻訳されたチベット語訳『菩提場経』は、ごく最近まで失われたものと考えられていた。

しかしその後、ショペンの論文発表から10年足らずの間に、サンスクリット原典から翻訳されたと思しきチベット語訳『菩提場経』の存在が、別々の学者によって二種類報告されたのである。1つはペリオ将来の敦煌写本 (Pelliot Tibétain) 中のもので、もともとラルー (Marcelle Lalou) の目録に記載されていたものを、シェレル-シャウブ (Cristina Scherrer-Schaub) が『菩提場経』に同定したのである (Scherrer-Schaub [1994])⁴。もう1つは A.D.1700 頃にチベットで編纂されたブダク (Phug drag) 写本中のもので、ブダク写本目録の著者サムテン (Jampa Samten) が目録の序文において紹介している (Samten [1992 : xxvi-xxvii])。

そこで本稿では、ショペンが参照できなかったこの二つのチベット語訳『菩提場経』を取り上げて、その特徴を紹介するとともに、今後の研究の足がかりとして、従来用いられてきた諸資料との比較から経題について考察してみたい。さらに、先行研究において問題とされていた「舍利のリス

ト」についても、新出の資料を交えて少しく考察を加えたい。なお以下では、Toh 508 のように序文、正宗分、流通分をもつ經典形式の『菩提場經』を完全版と呼び、Toh 509 のように『菩提場經』からの抜粋の形式をとるものを抄出版と呼ぶこととする。

2. 『菩提場經』完全版チベット語訳の資料

2-1. 資料の情報

敦煌写本 No.555⁵ (以下 PT) ka, 8a1-29b4 (22葉) (Lalou [1939 : 128])

敦煌写本群は8世紀末から9世紀半ばにかけて書写されたものと考えられている。PTには9世紀初頭のレパチェン (ral pa chen) 王の治世 (A.D.815-836 頃) に行われたとされる、訳語および綴字法の改訂 (第二次釐定) 以前の旧綴字が見られるため、8世紀末から9世紀初頭に書写されたものと考えられる⁶。ウチェン体で表裏5行ずつ書写されているが、最後の葉の裏 (29b) のみ4行で終わっている。この4行の最後の所は、ブダク写本と照らし合わせると經典の終結部ではなく途中であることがわかる⁷。このことはPTが不完全な原本から書写された可能性を示唆する。

ブダク写本 No.550⁸ (以下 Ph) rGyu sde, tsha, 50a8-73b8⁹ (Eimer [1992 : 49-50])

ブダク写本はA.D.1696-1706に西チベットのブダク僧院で書写・編纂されたもので、ブダク写本所収の經典を調査した先行研究によって、ツェルパ系・テンパンマ系いずれにも属さない独立した伝承系統の写本と考えられることや、他の版に比べて写誤や脱落が多いことなどが報告されている (Skilling [1994 : xxx-xxxi]・佐藤 [2005 : 76-78])。写本の質的には『菩提場經』もけして良いとはいいがたく、例えばPTとPhでは一方で具格になっている箇所が一方では属格になっている、あるいはその逆のことが頻繁に見られたり、しばしば訳語の相違が見られる。こうした場合、ほとんどはPTの読みを採らないと意味が通じない。また佐藤 [2005] によれば、ブダク写本『阿闍世王經』は第二次釐定以前の旧綴字を一部残しているという (佐藤 [2005 : 76-78]) が、『菩提場經』には旧綴字は見られない。コロフォンを欠くため翻訳者は不明。

Toh 508 (以下『重訳』) rGyu, na, 7b3-24b6

コロフォンから A.D.1743 にモンゴル人僧侶ゲンボキャブによって『菩提場莊嚴陀羅尼經』(T. No.1008, 以下『不空訳』)より重訳されたことが知られる。デルゲ版の開版(A.D.1733)以後の訳出のため当初 No.508 は収蔵されていなかったが、のちに No.509 の前に挿入されたと考えられている(松村 [1997: 14-16])。デルゲ版以外では、ナルタン版を底本にデルゲ版を校合したラサ版と、デルゲ版の復刻修正版といわれるウルガ版に収められている。おおむね原本に忠実に翻訳されている。

2-2. 資料の異同

PT・Ph・『不空訳』(=『重訳』)の三本の内容は大筋で一致しているが、細部では異同が見られる。三本を比較すると、PTと『不空訳』はよく一致し、Phに比べて若干増広している。例えば、経典の後半で陀羅尼の名称と陀羅尼を列挙する箇所では、Phは18の陀羅尼を挙げるのに対して、PTと不空訳は22の陀羅尼を挙げている。またその直後の成就法を説く箇所では、PTと不空訳にはPhにない一節が挿入されている¹⁰。またPTとPhは、訳語とその語順の大部分が一致しているものの、訳語の相違や語句・文章の出入りがしばしば見られる。こうしたPT・不空訳とPhの異同は、プダク写本の質からして単純にPhの写誤に起因するものと考えられなくもないが、PhのほうがPT・不空訳よりも古い伝承を保存している可能性もある。これら三本の関係を明らかにするために、より細部にわたっての比較が今後の課題となろう。

3. 経題について

3-1. 完全版のサンスクリット音写とチベット語訳

ショペン抄出版の経題について、チベット語訳に見られるサンスクリット音写から Bodhigarbhāṇa-kāralakṣa-dhāraṇī と推定する一方、当時『重訳』しか資料が知られていなかった完全版の経題については、これに近いものであろうと推測するにとどまっていた(Schopen [1985: 120-122])。そこで以下では、完全版とその他の関連資料に基づいて『菩提場經』の原題について考察する。その際にまず手がかりとなるのは、チ

ベット語訳に記されたサンスクリット音写である。PT・Ph・重訳には、それぞれ冒頭に次のようなサンスクリット音写とチベット語訳の経題が見られる。

PT skt : Bo dhi man ḍa a lang ka ra na ma dha ra ni u pa tsa ra

tib : byang cub kyi snying po'i gzungs kyi cho ga

Ph skt : Bo dhi ma ṇḍa a lam ka ra na ma dha ra ni u pa tsa yā

tib : byang chub kyi snying po'i rgyan 'bum ces bya ba'i
gzungs kyi cho ga

『重訳』skt : Bo dhi maṇḍa sya lakṣā langkā ra nā ma dhā ra ṇī

tib : byang chub snying po'i rgyan 'bum zhes bya ba'i gzungs

それぞれのサンスクリット音写を見ると、PT・Phの音写からは Bodhimaṇḍa-alamkāra-nāma-dhāraṇī-upacāra¹¹ という原題が推測される。一方、重訳から推測される原題は Bodhimaṇḍasya lakṣāalamkāra-nāma-dhāraṇī であり、PT・Ph と比べて Bodhimaṇḍa が属格であること、lakṣa が加えられていること、末尾に upacāra がなく dhāraṇī で終わっていることの三点が異なる。

つぎにチベット語訳を見ると、PT は音写に alamkāra が含まれるが、チベット語訳には相当する rgyan がなく、また Ph は音写に lakṣa がないにもかかわらず、チベット語訳には 'bum が含まれている。このように PT と Ph はサンスクリット音写と一致しないが、なぜこのような不一致が起きているのかは不明である。

また『重訳』については、原本である『不空訳』の経題は『菩提場莊嚴陀羅尼經』だが、これには十万を意味する lakṣa に相当する語句が存在しない。したがって、単語を機械的に置き換えるだけでは、lakṣa のあるサンスクリット音写と 'bum のあるチベット語訳を導出することはできない。そこで可能性としては、当時ゲンボキャブが利用可能であった抄出版の経題を利用したことが考えられよう。抄出版の byan chub snying po は bodhigarbha だが、漢訳に使われている「菩提場」のサンスクリット語が一般的に bodhimaṇḍa であることを踏まえれば、lakṣa と alamkāra に対応する 'bum と rgyan の語順は前後するものの、語句は一致しているの

で、サンスクリット音写とチベット語訳の導出が一応は可能となる。

3-2. チベット訳経目録のチベット語訳

チベット仏教前伝期の訳経目録『デンカルマ (*dKar chag lDan dkar ma*)』『パンタンマ (*dKar chag 'Phang thang ma*)』と、後伝期の学僧ブトン・リンチェン (Bu ston rin chen, A.D.1290-1364) の『仏教史 (*chos 'byung*)』「目録部」には、それぞれ『菩提場経』と思われる経題とその分量が記載されている。

『デンカルマ』No.341 : 'phags pa byang chub snying po rgyan 'bum gyi gzungs / 250śloka¹²

『パンタンマ』No.308 : byang chub kyi snying po 'bum gyi rgyan cho ga dang bcas pa / 200śloka¹³

『仏教史』No.1283 : byang chub snying po'i rgyan 'bum / 250 śloka¹⁴

これらの経題に共通する語句は byang chub・snying po・rgyan・'bumである。これらの語句のほかに、『デンカルマ』は 'phags pa (ārya) と gzungs が付されている。『パンタンマ』は rgyan と 'bum の順序が逆転し属格助辞で結ばれている。また最後に cho ga dang bcas pa、すなわち「儀軌をともなう」という語句が付されているが、これは『パンタンマ』では『菩提場経』のほかに No.309・No.310・No.312 にも付されている¹⁵。No.312 を除く三経典は、いずれも前半に主題となる陀羅尼にまつわる因縁譚を説き、後半にその陀羅尼を用いた儀軌を説くという共通の構造を持っている。そのため、この語句は原題を反映したものではなく、儀軌部分を有するという経典の特徴を示すために『パンタンマ』の編者によって付された可能性が考えられる。ただし、No.309 の関連資料として現存のチベット大蔵経に収められる『一切如来長髻勝と名づくる陀羅尼並びに儀軌』(Toh 594・595) は、経題に rtog pa dang bcas pa が付され、その対応するサンスクリット語は kalpasahita と記されている¹⁶。そのため、『パンタンマ』だけが 200 śloka となっていることも考慮すると、『パンタンマ』に記載されている経典は、PT・Ph の

upacāra や Toh 594・595 の kalpasahita のように儀軌を表す言葉をもつ、『デンカルマ』や『仏教史』に記載されているものとは別の經典であった可能性も完全には否定できない。『仏教史』は gzungs も儀軌を表す言葉もなくシンプルである。

これら訳経目録に記された経題から、『デンカルマ』では Ārya-Bodhimaṇḍa-alaṃkāra-lakṣa(-nāma)-dhāraṇī、『パンタンマ』では Bodhimaṇḍa-alaṃkāra-lakṣa (-kalpasahita あるいは -upacāra など)、『仏教史』は Bodhimanda-alaṃkāra-lakṣa などの原題が推測されよう。

3-3. 完全版を引用する文献におけるチベット語訳

Bentor [1994] によれば、チベット人学僧ペマ・ティンレー (Padma 'phrin las, A.D.1641-1717) の著作『瑠璃の鏡 (bai dūr ya'i me long)』(Padma 'phrin las [1973]) と、コントウル・ロドゥ・タイエ (Kong sprul Blo gros mtha' yas, A.D.1813-1899) の著作『水晶の鏡 (chu shel gyi me long)』(Kong sprul [1975]) に『菩提場経』が引用され、次項で取り上げる舍利のリストと共に経題を確認することができる。また先行研究では指摘されていないが、『蘇婆呼童子請問経 (Subāhupariṣcchā-nāma-tantra)』に対する著者不明の註釈『蘇婆呼童子請問経語義解説 (Subāhupariṣcchā-nāma-tantra-padārtha-tippaṇī)』(以下『語義解説』)にも、この二つの著作とほぼ同じ経題のもとに『菩提場経』の舍利のリストが引用されている。これらの文献に見られる経題は以下の通り。

『瑠璃の鏡』: byang chub snying po rgyan gyi gzungs kyi cho ga zhib mo

『水晶の鏡』: byang chub snying po rgyan gyi gzungs kyi cho ga zhib mo

『語義解説』: byang chub kyi snying po'i rgyan gyi gzungs kyi cho ga zhib mo

『語義解説』の byang chub と snying po に属格助辞が付されている点を除けば、これらの文献に記された経題は同じ語句からなっている。こ

の経題の特徴は 'bum を欠くことと、cho ga に修飾語 zhib mo（微細）が付されていることである。cho ga zhib mo は儀軌を表す kalpa や vidhāna の訳語として用いられる¹⁷ことから、儀軌一般を表す言葉と考えられる。『パンタンマ』では No.303・No.315 に付されている¹⁸。これらの経題からは、Bodhimaṇḍa-alaṃkāra(-nāma)-dhāraṇī に kalpa や vidhāna、upacāra などの儀軌を表す言葉が付いた原題が推測されるが、もし儀軌を表す言葉が upacāra であれば、その原題は PT・Ph のものと一致すると考えられる。

以上、『菩提場経』に関わるチベット語資料からその原題を推測した。その結果を、経題を構成する主要な語句の有無によってまとめると表1のようになる。まず byang chub・snying po・rgyan の三語については、PT のチベット語訳を除くすべてに共通していた。したがって経題の基本となる語句は、bodhimaṇḍa と alaṃkāra だと考えてよいだろう。しかし、そのほかの語句は資料間で少なからず出入りが見られ、厳密にグループ分けをすることはできないように思われる。唯一まとまりとして考え得るのは、PT・Ph のサンスクリット音写と『瑠璃の鏡』・『水晶の鏡』・『語義解説』に見られた経題、すなわち Bodhimaṇḍa-alaṃkāra-nāma-dhāraṇī-upacāra が推測されるグループで、これはほかのものと比べて 'bum がなく、そのかわり儀軌を表す言葉を持つ点が特徴である。

とくに PT・Ph・『語義解説』はサンスクリット原典から翻訳されたと考えられるため、インドにおいて『菩提場経』がこの経題のもとに流布していた可能性は高いといえよう。よって、『菩提場経』の原題としては Bodhimaṇḍa-alaṃkāra-nāma-dhāraṇī-upacāra を用いるのが、ひとまずは妥当と考える。ただし、『不空訳』や訳経目録などから推測される経題をもつ原典が存在した可能性も、当然考慮しておかねばならない。

表1 (○は語句が存在することを、空欄は存在しないことを表す)

		byang chub snying po (Bodhimaṇḍa)	rgyan (aṣṭkāra)	'bum (lakṣa)	gzungs (dhāraṇī)	儀軌を表す言葉
完全版	PT skt	○	○		○	upacāra
	PT tib	○			○	cho ga
	Ph skt	○	○		○	upacāra
	Ph tib	○	○	○	○	cho ga
	『不空訳』	○	○		○	
訳経目録	『デンカルマ』	○	○	○	○	
	『パンタンマ』	○	○	○		(cho ga dang bcas pa)
	『仏教史』	○	○	○		
引用文献	『瑠璃の鏡』	○	○		○	cho ga zhib mo
	『水晶の鏡』	○	○		○	cho ga zhib mo
	『語義解説』	○	○		○	cho ga zhib mo

4. 完全版と引用文献に見られる舍利のリストについて

『菩提場經』には舍利の種類をいくつか挙げる箇所があり、これは当時の舍利の概念を知る上で重要なものと考えられている。この舍利のリストはケードゥブジェ (Mkhas grub rje, A.D.1385-1438) の著作『タントラ部概論建立広釈 (rGyud sde spyi'i rnam par gzhas pa rgyas par brjod)』(以下『概論』)でも取り上げられているが、ショペンはその『概論』のリストが『重訳』に見られるリストと一致しないことを指摘した (Schopen [1985 : 123-128])。その後、チベット仏教における舍利の分類を研究したヤエル・ベンター (Yael Bentor) がこの不一致の問題を取り上げて、PT・Ph・『重訳』・『瑠璃の鏡』・『水晶の鏡』に見られる舍利のリストを整理したものの、結果として『概論』のリストと一致するものはなく、しかもそれぞれのリストが異なるなど伝承が錯綜していることが明らかになったのである (Bentor [1994 : 20-23])。

こうした伝承の錯綜が、舍利の概念の発展を反映した結果として起っているのか、あるいは単純な写誤による伝承の失敗なのか、まだ確定的なことはわかっていない。本稿でもそれを解決するだけの用意はないが、ただし先に触れたように、経題を調査する過程で『語義解説』が『菩提場

経』の舍利のリストを引用していることがあらたに判明したので、以下ではベンターの所論を参考にしつつ、この新出の『語義解説』のリストの意義について考えてみたい。

このリストは、「菩提場莊嚴」陀羅尼を受持読誦し、心に思い起こすことの福德がどれほどか尋ねる金剛手に対して、その福德の計り知れないことを文殊室利が比喻を以て示す中に現れる。従来の資料に挙げられている舍利のリストを表にまとめると、表2のようになる。

この表からわかるように、例えば如来の遺体舍利 (de bzhin gshegs pa'i sku gdung gi ring bsrel) はすべてのリストが挙げ、如来の法身舍利 (de bzhin gshegs pa'i chos sku'i ring bsrel) と遺物舍利 (sku bal gyi ring bsrel) は Ph を除くいずれもが挙げるなど、舍利の種類はある程度共通しているものの、その数については、Ph は二種、『概論』は三種、『不空訳』は四種、『瑠璃の鏡』は五種、PT は六種と、まったく一致していない¹⁹。

そこで『語義解説』のリスト²⁰はというと、興味深いことに『瑠璃の鏡』の五種の舍利のリストと同一のものが説かれているのである。ベンターによれば、コントウル・ロドゥ・タイエの『水晶の鏡』では、舍利のリストの引用の典拠が『重訳』であることが明言されているという。一方、同じく舍利のリストを引用する『瑠璃の鏡』の著者ペマ・ティンレーは、A.D.1717-18 のジュンガル (Dzungar) 帝国のチベット侵攻時に殺害されているため、A.D.1743 に翻訳が完了した『重訳』を参照することは不可能であり、したがってペマ・ティンレーは失われたと考えられていた完全版のテキストのうちの1つを利用できた、という可能性を示唆している (Bentor [1994: 20])。

しかしながら、『語義解説』のリストが『瑠璃の鏡』と完全に一致しているということは、『瑠璃の鏡』の舍利のリストの典拠として、五種の舍利のリストを引用する『語義解説』のような文献から孫引きされた可能性もあらたに考慮すべきだろう。加えて、五種の舍利のリストがチベット撰述の『瑠璃の鏡』以外にインドに遡る『語義解説』にも確認されたことによって、五種の舍利のリストをもつ『菩提場経』の原典が存在した可能性が高まったということ、また、註釈に引用されることから、チベットだけ

でなくインドにおいても、舍利の分類に関して『菩提場經』が信頼に足る経典として考えられていた可能性がある、ということも、併せて指摘できるだろう。

表2 (cf. Bentor [1994 : 20-23])

Ph	『概論』 ²¹	『不空訳』	『瑠璃の鏡』	PT
	如来の法身舍利 de bzhin gshegs pa'i chos sku'i ring bsrel	如来法身身分舍利	法身舍利 chos kyi sku'i ring bsrel	如来の法舍利 de bzhin gshegs pa'i chos kyi ring bsrel
如来の遺体舍利 de bzhin gshegs pa'i sku gdung gi ring bsrel	遺体舍利 sku gdung gyi ring bsrel	骨舍利	如来の遺体舍利 de bzhin gshegs pa'i sku gdung gi ring bsrel	如来の遺体舍利 de bzhin gshegs pa'i sku gdung gi ring bsrel
	遺物舍利 sku bal gyi ring bsrel	肉舍利	遺物舍利 sku bal gyi ring bsrel	遺物舍利 sku bal ring bsrel
				遺体舍利 gdung gi ring bsrel
芥子程の法舍利 chos kyi ring bsrel yung 'bru tsam		法界舍利	法舍利 chos kyi ring bsrel	法舍利 chos kyi ring bsrel
			芥子程の舍利 yung 'bru tsam gyi ring bsrel	芥子程の舍利 yung 'bru tsam kyi ring bsrel

5. むすびにかえて

以上、経題と舍利のリストについて考察した結果をまとめると、以下のようになる。

経題については取り上げたすべての資料で byang chun snying po と rgyan が確認されたので、Bodhimaṇḍa と alaṃkāra が基本になると考えられるが、それ以外の語句については資料によって出入りが見られた。ただし、完全版の PT・Ph に記されたサンスクリット音写 Bodhimaṇḍa-alaṃkāra-nāma-dhāraṇī-upacāra については、これと一致すると考えら

れるチベット語訳の経題が『瑠璃の鏡』・『水晶の鏡』・『語義解説』にも確認されたので、『菩提場経』完全版の原題としては、ひとまずこれを用いるのが妥当とした。

また舍利のリストについては、『語義解説』に引用された五種の舍利のリストが『瑠璃の鏡』のものと一致することから、次の三点を指摘した。すなわち、①五種の舍利のリストがチベット撰述の『瑠璃の鏡』以外にインドに遡る『語義解説』にも確認されたことによって、五種の舍利のリストをもつ『菩提場経』の原典が存在した可能性が高まったということ、②『瑠璃の鏡』にこのリストが見られることについては、ペマ・ティンレーが完全版を参照した可能性以外に、『語義解説』のようなこのリストを引用する文献から孫引きされた可能性も考慮すべきであること、③註釈に引用されることから、チベットだけでなくインドにおいても、舍利の分類に関して『菩提場経』が信頼に足る経典と考えられていた可能性がある。

最後に、『菩提場経』はショペンによってすでに指摘されるように非常に複雑な伝承をもつ経典である。本稿で確認した経題や舍利のリストの多様さも、この伝承の複雑さの一面を表すものといえるだろう。関連資料は比較的豊富にあるにもかかわらず、それらの具体的な関係などについては不明な点が多く残されているのも、こうした事情によるものかもしれない。しかしショペンが明らかにしたように、この経典がインド仏教徒の實踐に深く関わっていたことは確かであり、インド仏教の実態を解明する上で貴重な資料であることは間違いない。今後はより内容面に踏み込んだ研究や、抄出版など広範囲の関連文献を取り上げての研究を課題としたい。

略号

MMVR = *Mahāmayūrī-vidyārajñī*. Takubo, Shūyo (ed.): *Ārya-Mahā-Māyūrī Vidyā-Rājñī*, Tokyo 1972.

T. = 『大正新脩大蔵経』五十五卷. 高楠順次郎・渡邊海旭編, 東京: 大蔵出版 1924-1929.

Toh = 『西藏大蔵経總目錄 東北大学蔵版』. 金倉圓照他編, 宮城: 東北大学・印度学研究会 1953.

参考文献

Bentor, Yael

- 1994 “Tibetan Relics Classifications” *Tibetan Studies: Proceedings of the 6th Seminar of the International Association for Tibetan Studies* vol.1 Oslo. pp.16-31
- 1995 “On the Indian Origins of the Tibetan Practice of Depositing Relics and Dhāraṇīs” *Journal for the American Oriental Society* vol.115, pp.248-261.

Eimer, Helmut

- 1993 *Location List for the Texts in the Microfishe Edition of the Phug brag Kanjur*, Tokyo.

Kong sprul Blo gros mtha' yas, 'Jam mgon

- 1975 “Rten la nang gzhug 'bul ba'i lag len lugs srol kun gsal dri bral nor bu chu shel gyi me long” *Collected Works* Vol.12. Paro. pp.97-148.

Lalou, Marcelle

- 1939 *Inventaire des Manuscrits Tibétains de Touen-houang Conservés à la Bibliothèque Nationale I*, Paris.
- 1953 “Les Textes Bouddhiques au temps de Khri-srong-lde-bcan” *Journal Asiatique* vol.241, pp.313-353.

Lessing, Ferdinand D. & Wayman, Alex

- 1968 *Mkhas grub rje's Fundamentals of the Buddhist Tantras: Rgyud sde spyi'i rnam par gzhag pa rgyas par brjod* (Indo-Iranian Monographs Vol.8). Paris.

Padam 'phrin las, Rdo rje brag Rig 'dzin

- 1973 “Gzungs 'bul gyi lag len gsal bar byed pa bai dūr ya'i me long” *Rituals of Rdo-rje-brag* Vol.1. Leh. pp.287-362.

Samten, Jampa

- 1992 *A Catalogue of the Phug-brag Manuscript Kanjur*, Delhi.

Scherrer-schaub, Cristina

- 1994a “Some Dhāraṇī Written on Paper Functioning as Dharmakāya Relics: A Tentative Approach to PT350”

Tibetan Studies : Proceedings of the 6th Seminar of the International Association for Tibetan Studies vol.2. Oslo. pp.711-727.

- 1994b “Ways of Interpretation as Suggested by the Narrative’s Analysis of the Bodhimaṇḍalakṣālaṃkāra-nāma- dhāraṇī-upacāra” A paper presented at 11th Congress of the International Association of Buddhist Studies, Mexico City (October 1994). Abstract in Himalayan Research Bulletin vol.14 pp.86-87.

Schopen, Gregory

- 1985 “The Bodhigarbhālankāralakṣa and Vimaloṣṇīṣa Dhāraṇīs in Indian Inscriptions: Two Sources for the Practice of Buddhism in Medieval India” *Weiner Zeitschrift für die Kunde Südasiens* vol.29, pp.119-149 (in Schopen[2005: 314-344])
- 2005 *Figments and Fragments of Mahāyāna Buddhism in India*, Honolulu.

大塚 伸夫

- 2013 『インド初期密教成立過程の研究』 東京：春秋社

川越 英真

- 2005 『dKar chag 'Phang thang ma』 宮城：東北インド・チベット研究会

定方 晟

- 1997 「オリッサ州の仏教遺跡」『東海大学紀要文学部』67, pp.(1) - (24)

佐藤 直実

- 2008 『藏漢訳『阿闍伽国経』研究』 東京：山喜房佛書林

高田 順仁

- 1978 『インド・チベット真言密教の研究』 和歌山：密教学術振興会

田中 公明

- 2010 『インドにおける曼荼羅の成立と発展』 東京：春秋社

西岡 祖秀

- 1983 『「プトゥン仏教史」目録索引3』『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』6, pp.47-200
- 西田 龍雄
- 1987 「チベット語の変遷と文字」『チベットの言語と文化：北村甫教授退官記念論文集』pp.108-169
- 松村 恒
- 1997 「チベット大蔵経デルゲ版の開版について」『香散見草：中央図書館報』27, pp.12-16
- 芳村 修基
- 1974 『インド大乘仏教思想研究：カマラシーラ思想』京都：百華苑

(大正大学大学院博士後期課程)

- ¹ Bendor [1995 : 254]
- ² 実際は単純な抜粋ではない。Toh 509 と『菩提場経』の関係は込み入っているため、詳細は Schopen [1985] を参照されたい。
- ³ シェレル-シャウブによれば、プトンの『仏教史』仏説部のタントラ目録において「完全なテキストが探索されるべきである」などとすでに述べられているようである (Scherrer-Schaub [1994a : 714])。これが正しければ、チベットにおける完全版不在の状況は少なくとも14世紀初頭まで遡るだろう。ケードゥブジェの『菩提場経』に関する言及については note14 を参照されたい。
- ⁴ シェレル-シャウブによる同定については、Schopen [2005] に再録された Schopen [1985] の補遺において述べられている。ショペンによれば、シェレル-シャウブは敦煌写本中の『菩提場経』のエディションとテキスト研究を用意しているらしいが、いまだ出版されていないようである。
- ⁵ International Dunhuang Project (IDP) のホームページにおいて写本の画像が公開されている。筆者もその画像データを使用させて頂いた (http://idp.afc.ryukoku.ac.jp/database/oo_scroll_h.a4d?uid=163655455010;bst=1;recnum=58948;index=1;img=1)。
- ⁶ 第二次釐定については西田 [1987] を参照。PTに見られる旧綴字法は、sts- (lastsogs pa)・my- (myin, myed)・再添後字 -d (gyurd) の使用、句読点としてツェク (tsheg) を縦に二つ重ねた記号にシェー (shed) を足したものが用いられる、などである (西田 [1987 : 119-125; 165])。
- ⁷ 最終部は Ph の 73a8、『不空訳』の 675b5-7 辺りに相当する。
- ⁸ ブダク写本は Institute for Advanced Studies of World Religions (IASWR) から

マイクロフィッシュが公刊されている。筆者は国際仏教学大学院大学が所有するマイクロフィッシュからのコピーを使用させて頂いた。

- ⁹ 58b から 66a までの 8 コマ（8 葉）分が重複して収録されているので、Card No.11F/53 のつぎは 13C/53 につながる。

- ¹⁰ 『不空訳』と PT に挿入されている一節はつぎの通り。

又法加持窣覩波椽八千遍。安於塔上。一切如來舍利來入此塔。則成大舍利窣覩波塔（T.vol.19, 675a21-23）

srog shing la lan brgyad khri bzlas brjod nas/ mchod rten la bcugs na/ de
bzhin gshegs pa thams cad gshags te/ mchod rten de'i nang du 'jug
par 'gyur ro/ ring bsrel can kyi mchod rten chen po zhal bsros par 'gyur ro/
(PT: 29a5-b1)

（塔柱に八万遍念誦してから塔に入るならば、一切の如來がそこへ来て、その塔の中に入るだろう。舍利を有する偉大なる塔を建立することとなるだろう）

- ¹¹ PT の最後の u pa tsa ra は、音写中の alangkara, nama, dharani のように長母音を表す記号が脱落していると考えられるので、もとは儀軌などの意味を持つ upacāra であったと考える。また Ph の u pa tsa yā についてはよくわからないが、もし upa-√ci (to heap, to gather など) に由来する言葉であれば cho ga と対応するとは考えがたく、何かしらのコラプションが起きていると考えられる。よってここでは仮に PT と同じ upacāra と考えておく。経題に upacāra をもつものは管見の限りこの『菩提場経』以外に知らないが、經典中の用例としては『孔雀明王経 (Mahāmāyūrī-vidyārājñī)』末尾に説かれる孔雀明王供養法が upacāra と呼ばれている (MMVR: 61.8)。

- ¹² Lalou [1953 : 327]・吉村 [1974 : 149]

- ¹³ 川越 [2005 : 19]

- ¹⁴ 西岡 [1985 : 62]、なおデルゲ版・タルシンポ版・シャル版では byang chub が byang chub kyi となっている。

- ¹⁵ 川越 [2005 : 19] No.309: 'Phags pa gtsugs tor rnam par rgyal ba'i gzungs cho ga dang bcas pa (『仏頂尊勝陀羅尼經』T. No.971) ; No.310: 'Phags pa gtsugs tor dri ma med par snang ba'i gzungs sngags cho ga dang bcas pa (『無垢淨光大陀羅尼經』T. No.1024) ; No.312: 'Phags pa spyān ras gzigs dbang phyug yid bzhin gyi nor bu 'khor lo sgyur ba'i gzungs sngags cho ga dang bcas pa (*『觀自在如意輪陀羅尼』)、No.312 はブトン『仏教史』では「探索されるべき經典」とされており、詳細不明。

- ¹⁶ Toh 594・595: de bzhin gshegs pa thams cad kyi gtsug tor rnam par rgyal ba zhes bya ba'i gzungs rtog pa dang bcas pa.

- ¹⁷ cf. *Tibetan-Sanskrit Dictionary*. J. S. Negi (ed.) Vol.3, p.1231.

- ¹⁸ 川越 [2005 : 18-19] No.303: 'Phags pa nor bu chen po rgyas pa'i gzhal med

khang rab tu gnas pa gsang ba dam pa'i gzungs kyi cho ga zhib mo (『大寶廣博
樓閣善住秘密陀羅尼經』 T. No.1005) No.310 : rTen cing 'brel bar 'byung ba'i
tshigs bcad kyi cho ga zhib mo (*『縁起心儀軌』)、No.310 については詳細不明。

¹⁹ それぞれのリストの詳細については Bentor [1994 : 20-23] を参照されたい。

²⁰ 行者が滅罪を作そうとするならば、舍利を有する仏像か仏塔を供養すべきである
(Toh 805, rgyud, wa, 11962)、という経文のうち「舍利を有する」ということに
対する註釈である。当該箇所は以下の通り。

ring bsrel can gyis zhes bya ba ni byang chub kyi snying po'i rgyan gyi
gzungs kyi cho ga zhib mo las/ chos kyi sku'i ring bsrel dang/ de bzhin
gshegs pa'i sku gdun gi ring bsrel dang/ sku bal ring bsrel dang/ chos kyi
ring bsrel dang/ yungs 'bru tsam kyi ring bsrel zhes gsungs te/ (Toh 2672,
rgyud, thu, 60a5-6)

(舍利を有する、というのは、『菩提場莊嚴という陀羅尼の儀軌』に「法身舍利
と、如来の遺体舍利と、遺物舍利と、法舍利と、芥子程の舍利」と説かれている
のであって)

²¹ 『概論』のテキストおよび英訳に Lessing&Wayman [1968]、和訳に高田 [1978]
がある。当該箇所の和訳はつぎの通り。『菩提場の十万莊嚴と名づけるガラニ』は現
在、チベットにおいて完全なものがない。昔の諸の智者がこれを〔チベットに〕請来
したとき、〈如来の法身の舍利、遺体（骨）舍利、身像（肉）舎利の諸を塔の中に入
れるべきである〉と言われた。法身の舍利とは、諸のガラニである。遺体（肉）舎利
とは、遺体から生じた芥子の粒ほどの舍利である。身像（肉）舎利とは、塑像である。
そして、これらは順次に上、中、下である、といわれた。」(高田 [1978 : 193-194])
なおショペン、ウェイマンが「invited」と訳し、高田が「請来した」と訳した
drangs bar という言葉は、「quoted」あるいは「cited」すなわち「引用した」と解
釈すべきであるとしている (Schopen [1985 : 124])。本稿ではショペンの解釈に従
う。

